

まきどき・植えどき・収穫どき
どきどき情報 9月

● 野菜の作業

秋～冬期にかけての品目確保と来年の生産に
むけての準備をしましょう！

種まき	定植（植付け）	栽培のポイント
<ul style="list-style-type: none"> ・タマネギ ・ホウレンソウ ・シュンギク ・コマツナ ・ネギ ・地ダイコン ・ラディッシュ ・野沢菜 など 	<ul style="list-style-type: none"> ・ハクサイ ・タアサイ ・チンゲンサイ ・ニンニク ・イチゴ など <p style="text-align: center;">収 穫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ホウレンソウ ・ブロッコリー ・ピーマン ・キュウリ ・トマト ・カボチャ ・リーフレタス ・サツマイモ など 	<p>● タマネギの育苗と定植に当たっての留意事項</p> <p>すでに播種された方も多いと思いますが、良質苗の生産と適期定植に心がけましょう。苗は本葉2枚頃までは根張りが小さく、乾燥に弱いので午前中にかん水を十分行ってください。間引きは株間が1～1.2cmになるよう1～2回除草を兼ねて行ってください。生育が旺盛になるとベト病やスリップスなどの被害が見られるようになるので必要により数回防除を行ってください。</p> <p>苗取り時は根が切られたり葉も傷みます。苗が伸びすぎた場合は葉を切除したいところですが、葉を切ると生育が抑制され球肥大が劣り、著しく減収してしまいます。根も多く切断すると植え傷みが大きく欠株が多くなり大球割合も減少してしまうことか葉はもちろん、根もなるべく切らないように苗取りを行いましょう。</p> <div style="text-align: center;"> <p>葉が伸びすぎた感じ 20～30cm 根がよくて白く伸びる 葉が垂直 直径5mm程度 葉が細長い 伸びが悪い 基部がふくらんでいる 細く全体に貧弱 葉数が多い (直径6mm以上) 太すぎる 枯れ葉</p> <p>○好ましい苗 ×好ましくない苗</p> <p>〈定植時の苗の大きさ〉 千曲中高 1本重5～6g 茎径5～6mm 七宝甘70 " 4～5g " 4～5mm</p> </div>

● オンシツコナジラミ、ハモグリバエ、スリップス類の生態と効果的な防除法

～難防除害虫は、早期発見と初期防除が大切です！～

1 オンシツコナジラミ

症状は、最初コナジラミが排泄する「甘露」の小さな水滴状のねばねばしたものが葉の表面にたまり濡れます。キュウリの場合、甘露がたまった葉の上に位置する葉の裏面に多数のコナジラミが寄生しています。この甘露にすす病菌が発生し始め、最初は小さな黒い点が認められるが、後には葉の大部分がすすで覆われるようになり、激発すると葉の同化作用が妨げられ葉の傷みも早くなります。キュウリやカボチャで多発しやすく、キュウリやメロンの萎黄病ウィルスも媒介することもあります。

成虫は若い葉を好んで吸汁し産卵します。1雌当り1回30～500個を産卵し、約1ヶ月で1世代を繰り返します。発育最適温度は23～28℃で高温多雨条件下では発生が抑制されます。そこで、作物の連作されている温室では多発しやすいので、収穫終了後、1週間程度太陽熱での蒸し込みによる防除が効果的です。また、虫の寄生していない苗の植え付けや圃場衛生の徹底等が重要であり、発生密度が高まり常時発生するようになると防除が困難となるので生育初期に重点をおいた防除が必要です。

施設栽培では開口部に防虫ネットや寒冷紗被覆するとともに、農薬を使用する場合は同系統の薬剤の連用や多用をしないように注意しましょう。

2 ハモグリバエ類（エンドウハモグリバエ（別名ナモグリバエ）等）

被害は、葉裏でふ化した幼虫が、その部分を食害し白斑となって現れます。この白斑を基点に幼虫が蛇行しながら葉肉を食害し、表皮だけ残って不規則な白いすじ模様を描きます。エンドウの場合発生が多いとさやのつきや子実の稔実も悪くなりかなりの減収となってしまいます。

卵は葉裏のへりに尾端で傷つけたあとに1粒ずつ生みつけられます。エンドウハモグリバエは、別名ナモグリバエともいわれ、キャベツ、ハクサイ、ナタネなどのアブラナ科の葉に食入し加害します。

防除は、成虫の産卵最盛期に防除を行うが、実際面では成虫の飛来を把握するのは難しいので、少し被害が見え始めたときに重点的に防除します。なお、殺虫剤の定植時同時処理による防除と組み合わせるとより高い効果が期待できます。

3 スリップス類（ミナミキイロアザミウマ等）

成虫は約1.2mmで、幼虫が舐害します。初期症状は、葉脈ぞいにカスリ状の小斑点ができ、幼苗では心葉の展開が悪く巻縮し伸張が悪くなります。密度が高くなると葉縁から褐変し巻縮して枯死してしまいます。キュウリでは幼果が加害されると果面が凸凹になり、イボが退化し曲がり果となります。多寄生されると果皮がサメ肌状となってしまいます。卵は葉脈付近の組織内に産み付けられ孵化した幼虫は組織を舐害し、蛹化はほとんど土中で行われ、羽化した成虫は再び飛来し産卵します。成虫になるまでには、25℃では約15日、産卵期間は数十日に及ぶと言われており、1雌当り50～100卵産み、露地では7～9月の繁殖が著しいが沖縄を除く国内では露地での越冬は確認されていません。

発生は周辺に果菜類を栽培していたり、雑草が繁茂している周辺での発生が多ので施設では開放部に寒冷紗を張ったり、地面にシルバーマルチを行うとともに低密度期から定期的に防除を行いましょう。

● ハウス栽培での害虫の効果的な防除方法

ハウス栽培では、病害虫ともに定期的な換気、雑草防除などを行い栽培環境の維持に努めるとともに、害虫では開口部を防虫ネットや寒冷紗で被覆し、できれば黄色粘着トラップを設置し成虫の発生消長を把握し、発生した場合は発生初期での重点防除に努めましよう。



農業豆知識

《天気予報の見方と活用》

天気予報は農作業等では大変重要な情報です。上田地域の気温等は上田市古里の観測所や鹿教湯などの観測点で観測されています。ちなみに上田市古里の観測所の標高は502m、鹿教湯は721mです。

気温は、標高が高くなり気圧が下がるにしたがって低下しますが、空気塊（空気塊とは一定の性質を持った一定の大きさの大気の塊）が上昇するとともに気温が低くなる割合を専門用語で「気温減率」というそうです。気温減率は空気塊の中に雲になる粒が発生していない時は100mで1℃低下するとされていますが、実際は空気塊が持っている水分の多・少や周辺の空気塊との圧力差などによってそうはならず、平均的には0.6℃～0.7℃であり、一般的には0.65℃といわれています。

たとえば、上田の翌朝の気温予測が10℃となった場合、標高700m地点では8.7℃程度と予想されますので、自宅（農地）の標高を確認し、気温予測をしたり、温度計を設置し自分の地域の温度の変化の傾向を知っておくのも良いのではないかと思います。

なお、参考として丸子消防署の標高は520mほどであり、周辺地域の観測地点では、立科が715m、菅平が1,253mですので参考にさせていただきたいと思います。



水稻収穫適期予測



出穂期以降の平均気温を足し上げる「積算気温」により穫開始日の予想を行っています。

品 種 名	登熟に要する積算気温	標高	出穂期	収穫開始予想日	備 考
あきたこまち	1,000℃	700m	8月 3日	9月 1 4日～	8月21日までは実測値、以降は平年並みの気温経過として予想しています。
コシヒカリ	1,020℃	500m	8月 1 4日	9月 2 5日～	

●刈り遅れは「胴割れ米」の発生を助長します。計画的な収穫ができるようコンバインや乾燥施設の整備は早めに行い、ゆとりある収穫・乾燥調製の計画を立て、品質向上を第一とした作業を行いましょう。

【帯緑色籾歩合による収穫期の判定】

- ・「帯緑色籾歩合」とは緑色の籾が1穂内に占める割合のことです。
- ・1穂内の緑の籾が「10%」になったら収穫開

あさつゆ連絡先 電話:FAX 41-1062

技術事項作成協力：上小農業改良普及センター
中澤普及員 (TEL 25-7157)